



目次

滿蒙研究要目

研究

支那大陸に雄飛せんとする人に

落葉松種子に就て

森林家としての常識

◇文苑

舊友の面々 旅から歸つて

吉野紀行 第二學年修學旅行日記

夏の夕

◇雜報

學校便り 豫算會記事 辯論會便り

會員消息

〔1〕 日五廿月七幸七正穴 號五百第 {日四十月六年四十四治明} 日五廿月每 行發期定

川口君寄稿「滿蒙研究」に就て

六月號に於て滿蒙研究第一回を掲げしが實は本月號所載「支那大陸に雄飛せんとする人に」を最初に掲ぐべき筈なりしに編輯上粗漏を生ぜしは寄稿者に謝する所なり今左に此題目下に於ける目次を列記し豫め讀者の注意を促さんとす、尙寄稿者より地圖統計等は必ず挿入せられ度希望あり編者も固より同意にはあれど印刷上特別の技巧を要するものもあり已を得ず省略せしものあれば御諒恕を乞ふ

支那に雄飛せんとする人に

總說

各論

第一卷 滿蒙研究

第一章 門戶事情 (前回大連とあるを改む)

第二章 滿鐵會社事情

第三章 都市事情

第四章 農業事情

第五章 林業事情

第六章 養牧事情

第七章 鑛產事情

第一章 門戶事情

第一節 總論

位置、沿革、氣候、人口、附職業

本論

第二節 都市

設備、道路、建築、官公署、行政制

度、教育衛生、遊覽地及娛樂場、新聞雜誌及旅館

第三節 埠頭

第四節 交通及通信

第五節 經濟

通貨、金融、金融機關、物價並勞働賃、物價騰貴狀態附苦力に關する研究

一、緒說、二、出稼の原因、三、移動期並經路及人員、四、行先地、五、滿州玄米數、六、結論、

第六節 產業

第七節 輸出入貿易

研究

支那大陸に雄飛せんとする人に

總說 在大連 川口勇二郎

「人間萬事金の世の中」とは金錢の爲に營々たる工商を擯斥した武士時代でさへ一の金言たるを失はなかつた况んや異常なる經濟の發達を來したる現代に於てをやである、一錢よりは千錢、一燈よりは萬燈の方が受くる者の喜ぶ所、衣食足らずして争でか美德を成し得ん、よし成じ得たりとするも其徑たるや極めて狭少にして云ふに足らぬものである彼の山下船成金が百萬金を教育、軍事慈善の事業に投じたなどは誠に大徳行者と謂ふべきである。養老の瀧の孝子の如きは天保時代の少年には相應しき孝子のモ

アルであつたが將來は其精神に加ふるに物質の黄金を以てせざれば眞の孝子とは謂へないと思ふ、かく云へば人は余を以て拜金宗のモデルと思ふであらう然し現時の趨勢を見よ成功者云へば大學の銀時計でなく、金物となる事を云ふのではなからず、併し誤解してはならぬ余は金錢其ものよりは其もの勢力を欲し、のちある即ち宇宙間のあらゆる目的を達するに最大至上の勢力があるから金物を希望するのである、世上で謂ふ灰吹翁は余の欲しない所である、積みて且つ散らすを解する否寧ろ散せんが爲に取らんとするものである、個人のみか國家でも武士は食はねど高揚子は過去の事となつた、見よ今次の歐洲戦亂に於て食糧及工業原料の自給獨立が國家の存立上甚だ重要な事となつたのを、流石に慧敏なる獨逸は戰前已に今日あるを豫期して可及的自給的經濟とすることに大努力を爲した彼が世人の豫期以上に耐久力を示して居るのは實に之に基因するのである、此に於てか他列國も競うて其宏大な富源を開発利用して自給的にするを國是とする様になつた。然るに我國を見るに如何に國土内の富源を開発しても其原料では到底數量種類共に極めて少量で國民の希望を満たす事は出来ないのである工業原料のみではなくて國民の食料品でも時には外國から供給さるゝこともある一朝凶年に際會した時は其供給を印度、支那に仰がなくてはなるまい、況んや

一朝、有事に際會したる實に寒心すべき事ではなからず、然るに幸なる哉隣邦支那には此等の原料品並に食料品を蔵すること殆ど無盡と稱して過言をなさない、夫故我國要路よりは各専門の學者を支那に派して實地調査研究に大努力を注いで居る、近き將來に於ては支那資源を開発利用するは當然起るべき問題である、且つ熟々思ひ見るに歐洲大戦亂に於て列國は己に二千幾百億の戦費を投じて居る此曠古の大戦に依て各國が被る大瘡痍を挽回せんが爲に戦後各國は何れも戦時に劣らざる必死の計劃と努力を試むることゝ當然であらう其結果恐らく何れの國に於ても自國內の産業を保護獎勵して銳意製造品の輸出と他面に於ては關稅政策に依りて我國現時の順調なる對歐貿易は斷然反對の現象を呈する時機が到來するは疑を容れる餘地がない。其他東洋の歐米殖民地に對しても近來母國以外の輸入品の關稅を増徴する議さへある位であるからこの方面の貿易も不可能と謂はなくてはならない。然るに隣邦支那は我邦と唇齒輔車の地位にあつて其貿易の如きも現在に於てすら對支貿易は全貿易額の約二割餘を占めて大正五年には二億三千萬圓に達して居るのである尤も之は歐洲戦争の興へたる一時的變ではあるが過去の趨勢より觀ても逐年對支貿易の重要な事を示しつつあるのである加ふるに我對支輸出品は綿絲、布、砂糖、燐寸、紙

類、帽子、洋傘、石鹼、其他の雜貨類で殆ど我代表的生産品若くは海産物、石炭、銅の様な重要な天産物である譯して支那の對外貿易を概見するに我邦との貿易は約二割七分強を占め實に第一位に位し而もその輸出品たるや歐米品と異つて日常の必需品である、かく觀じ來る時は我貿易の發展地としては向に天望無涯の觀あるは一に支那市場を殘すのみである、元來支那は國土の大にして民衆の多き事宇内に冠たると共に凡百の貨物殆ど國內に生産せざるものなき爲の自ら内に足りて外に待つ必要がないから殆ど孤立經濟を營むことが出來加ふるに保守鎖國の國是を採て居た結果世界産業には極めて頑迷の見を持つ未開の状況にある、故に一步先んじて支那を知るは理論より以上儲かるものである。余は嘗て秋田に居た時儲け話を聞いた事がある、今から三三十年以前には關東信州あたりの、山師が其地方の杉山を買ふに一山と願を出しても三山も四山も伐つたり千本の代價を拂つて數萬本を伐つても何等制裁がなかつたものなといふ、かゝる時代には山元に於ける木材の價格は殆どゼロであつた且又労働賃の如きも極めて低廉でキナ粉握飯と十錢内外やれば悦んで働いた夫に無智蒙昧なる彼等は金錢の數量の多きを希望したので穴アキ錢をカマスで運搬して分與したのである、最近でも秋田では杉を伐採するに根元の曲部を三四尺残した、之を五六

年前には大小に拘はらず一株平均一錢にて拂下を受けて樽材に製して暴利を占めたのであるが後、儲るゝで皆手を染め今では一株平均五六十錢、中には一圓内外するものもある、人がよい汁を吸うて居るから己も吸はうとする時は己に後の祭である、支那がよい儲があるから行かうと云ふ時は己に遅い、世人が餘り注目せぬ時世間では語として解釋を下しかねる其時分が奇利を博する秋である、一攫千金の時代である、雄飛せよ！飛躍せよ！來れや來れ未開の天地へ！無盡の寶庫へ！！

落葉松種子に就て

大日本山林會特別會員 中村子之作

我が長野縣は七千尺乃至一萬尺の高峯で其四周を圍繞され而して其高山の四五千尺の所には本邦他に比類なき落葉松の天然林が帯狀を成して居る、今むり百年前己に其山抜苗で植林した事實がある、其成績が優良であつたから明治初年に人工育苗者があり明治二十年後に至りて大に盛になり全三十二年の頃には勸業事業として縣下十ヶ所に大小計五十町歩の縣設苗圃の設定を見育苗を公私山野に植栽させた全時に扁柏、赤松、杉、桐等を養成したが縣下に於て植林と云へば落葉松を植ゆる事の様に考へ世人

は落葉松造林の事を信濃林業と稱するに至つた。さて落葉松は特性として他樹の生育せざる火山岩、火山燒土、高山寒冷地、石炭質地に適しよく寒氣に堪へ乾燥に堪へ最適地にありては速成且つ肥大長幹材となる然れども赤松と等しく極めて陽樹なるを以て濕地及庇蔭地には成育せぬ、又落葉松は他の陽樹と混交林をなす事を嫌ひ譬へば赤松と混交すれば先植優勝となり全時に混植すれば落葉松勝ち或は赤松優勝たる事あり又一方多き時は多きもの勝つ只落葉松と混植し得べきものは木會五木あるのみ

本多博士の森林學に曰く

落葉松は邊材白色、心材赤褐色にして稍々赤松に似其質剛耐久、能く水濕に堪へ且つ工作に施し易し専ら家屋の建築、船艦、橋梁、電柱、其他の用材として使用せらる本邦、針葉樹として船艦材として亞米利加産オレゴンパインに代用し得べものは只此落葉松のみ又鐵道枕木として栗に亞ぐ

と云へり
落葉松の種子は園藝的果實の如く毎歲結實するものに非ず當年豐饒なれば一年乃至三年間は休養するを常とす併し豐饒なる年と雖も區劃團成的結實をなし其他は結實せざるを常とす。
落葉松種子は其前年土用明け二百十日の頃に至れば來年度結實の良否を明かに豫測し得べし余輩大正四年及五年に於て秋季已に

翌年の結實せざるを豫見せり又昨大正六年秋季に於て本年必ず結實すべきを豫告せるが本年は豊作若しくは中作なるべく今後大なる天變なき限りは必ず豊作なる事を斷言す昨冬以來落葉松種子は大暴騰を告げ本春の如きは如何はしきものにて一升(量目百六七十匁)代金十五圓餘を以て取引せられたりされば官署其他豫算を以て施業する向はかゝる年に於ては事業を繰延べ豊作の年を以て擴張するを利とす。
該種子を貯藏するには蠶種を貯藏する風穴等に完全に煙草の木箱又は石油木箱へ入れ置けば一年間は更に新種と異なる事なし故に豊作の年に於て二年分を購入し一半を完全なる風穴に貯藏するを得策とす。

落葉松種子は播種して發芽の時子葉五葉を發するを普通とす、風選して最優良なるものは六葉以上八葉迄の子葉を發するもの三分一に及ぶ此等の種子は一升の量目二百十匁に上る北海道林業會報第一六第三號中島林學士の所説は大体、予の説と一致すれど予の實驗を擧ぐれば左の如し

一升量目	發芽率	假定價額
百六十五匁	四〇%	一圓
百八十匁	六〇%	二圓
百九十五匁	七五%	四圓
二百五匁	八五%	六圓
二百十匁	九五%	九圓

(右ハ風選種子ニシテ切斷試驗ニ依ル)
更に水選種子一升の量目は二百十五匁にし

て切斷試験に依れば全發芽率を有するものなるが價格としては一升代金十二圓餘なり然るに實際發芽を有するものは百九拾五級七十五%位にして二百〇五級に及ばず然れども發芽したるものは六本以上の子葉を有するもの殆ど半す斯の如く發芽歩合の減するは製造中傷きたるもの早く穀中に浸水して沈下せしに依る更に水選中最初三四時間に沈下したるものを除き其後のものみにも實際の發芽は二百十級と殆ど同様なり彼の赤松種の如き普通一升量目二百五十級又は二百六十級なるに水選によれば二百七十級餘となる然るに播種して二百五十級の種子に及ばざるは製造中傷きたる穀が早く浸水して沈下したるに依る更に水選の初め三時間に沈下したるものを除き其後のものみにても二百六十級のもの殆ど同等なりとす尙水選は寒中に行ひ充分の注意を用ひざれば却りて水選せざるものに劣る事あり若し三四月頃水選して日光乾燥等を行へば發芽力の殆ど全部を失ふ事あり故に直ちに播種するを要す

落葉松毬果の優劣調査は種々の方法ありと雖も丁寧に脱種して羽根の折れざるをよしとす而して量目の差による發芽率左の如し

羽付一升量目 發芽率(但し切斷)
六十級乃至六十五級 二十%乃至十八%
七十五級乃至五級 六十%乃至五五%
而して前者は凶作の種子に屬するものなるが豊作の年と雖も母樹が落葉松の最上部界

即ち白檜、唐檜、樺、シツメ等と混交せる位置にあるか又は大溪澤の北面或は山岳の北東面、溪澤の白檜、樺、潤葉樹等と混交中のものか又は人里附近のものより採取したるものなり後者は豊作年の單純母樹林中西南面に向ひ而も壯年樹より採取したるものなり更に下方赤松林中に混交したるものは害虫の被害等あり且つ發芽の部落ちを常とす。

落葉松種子を賣買するに單に一升幾何といふ事は誤れるの甚だしきものにして必ず量目に依らざるべからず即ち前記一升量目百八十級以上(發芽率六〇%)のものを以て確實なる種子とす。

森林家としての常識 (續)

立道生

算盤玉用材
つげ、つばき、さくら、うめ、わご、ひひらぎ、かし、紫檀、黒檀、くろがき、ぶな、はんのき等、底はんのき、さくら、鐵ハ煤竹及び青竹ヲ用フ。つばきハ染メテつけ擬トナシ。さくら、うめハうめ材ト稱ス。實際うめハ材料ナキヲ以テ使用セズ。わご、ひひらぎハ主ニ木地ノ儘用ヒ。かしハ染メテ紫檀擬トナス。あかがしハ上等ニシテ紫檀擬トナル。材料ヲ表示スレバ次メ如シ

上等材 紫檀、黒檀、花桐、鐵刀木
普通材 かし、みづめ、さくら、ぶな、はんのき、はぐく、しほち

玉用材 上等材 花桐、つげ、うめ、紫檀、黒檀、普通材 かし、みづめ、さくら、ぶな、はんのき、はぐく、しほち

鐵用材
鐵ノヘラハ割材ヲ用フ
鐵ノ柄 信州ニテハぶなヲ用フ
鋤ハぶな又ハさくらニシテ、柄ハかし、ぶなヲ用フ。ぶなハ最モ可ナリ、ならヲ用フルコトアレハ脆クシテ折レ易シ、馬鐵ハならニテ作り手ノ處ニ針葉樹ヲ用フ、踏鐵ノ台ハさくら、けやき、すぎ、ひのき、栗ヲ用ヒ柄ニハ杉又ハひのきヲ用フ

下駄用材
きりヲ第一トス、近年北海道ヨリせんノ下駄棒多量ニ輸入シ來リ安價ノモノハ悉ク此ノ材ニテ作ラル、又塗下駄トシテハすぎ材ヲ素地トス、其他さわぐるみ、やまさりノ下駄ハ長野縣及ビ東北地方ヨリ産ス、名古屋地方ニテハ木會産ノさはらヲ塗下駄トシ好評アリ、又ほのき、くりヲ以テモ作ラル、長野縣ニテハさわぐるみノ外きはだヲモ用フ

下駄齒用材
かし、ぶな、けやき、ほのきヲ主トシ其他そね、しい、むく、なら、くぬぎ等トス、鹿兒島地方ニテハたぶ、いちむがしヲ用フ、かし材ハ十中ノ六七分ヲ占メ次デぶなトス、けやき以下ハ其ノ需要僅少ナリ

櫛用材(木櫛)
木會ハ御六ヶしト稱シテ櫛ノ名産地ナル

文苑

舊友の面々 (東西南北、二)

春公

大正五年春宇都宮六十六聯隊に新井彌藏君を訪ねる。君も意外であつたらう、全く奇遇といはうか、暫らく營内を語り歩いた。『アレガ那須山です』折柄學科試験中なので直ぐ別れた。僕も先を急いで。

全年秋目黒の寓へ黒縁の眼鏡君が訪れた。誰あらう土屋弘平其人である、君に依つて神戸、水野、肥田、長谷川、某(失念)諸氏の消息も聞いた。其後音信を絶つたが今は上野の某専門學校にゐるやうな。

大正六年秋僕が一ヶ月許り日光へ行つた後、佐倉の兵隊さんが乗込む。そして妙とも、珍とも、同輩のK君の家へ泊り込む。たのしみ、神作志願兵殿、當然僕の噂は出たものと見て、手帖の端切が其後K君の手を経て渡された。因に此K君は岐阜の人で都竹君や細江君も知つてゐるやうだ。

今年の春僕は一泊イを連れて神田の錦輝館に入つた、下思ひ出したのは恰かも七年前が浅草へ〜と繰出す晩に、君とたゞ二人で此館へ来た事を。其後火事で焼けたから建物は變つたが二人の姿はアリ〜と見た。是が二回目、三回目は豈圖らんや、

君も僕も一方ならぬ恩顧を受けたN先生と連れ立つてゐた。夫してフィルムは遠く千葉に飛んでゐた、夫れはツイ五月廿七日の夜。

大正七年春、偶然にも日比谷内幸町間の電車で見覺のある顔を見つけた。然しスタイルは全然變つてゐた紳士なので、一寸躊躇したが果たして角田久福兄であつた。

惜しい哉直ぐ下りたので詳しく語る間がなかつた。『ヤァ』『ヤァ』『内幸町の共済生命保險にゐる。』宿は澁谷。未だ學校を出な許した。夫れつきり其後澁谷のスタイションで後姿を見たが、電車を急いだので言葉をかけなだ。一つは若い人もゐたので遠慮もして。

兄よ僕も四月まで中澁谷から通つてゐたがツイ番地を忘れたので訪問の機を得なんだ残念乍ら。

全春澁谷の有馬館に吉川君を訪ねたが、下宿の方にも旅館の方にもゐなかつた。否、たのしみもないとこいつた。確か林友で見て来たのに。然るに過般旭樓へ新家先生をた訪ねた節、少し前に君も来て居たと聞いて、よく〜縁がないと思つた。

君よ僕も代々木の逍遙いて明治神宮を離から拜した、希くは内部の様子など承り度いものだ。

ガ最モ廣ク世ニ賞用セラレ、材ハつげ、わす、うめ、ひひらぎノ四種ニシテ古來最モ上品トセラレタル故ニ如何ナル樹木ヨリ作ルモ以上ノ樹名ヲ冠セザレバ顧客ノ意ヲ迎フルヲ得ズ、其他地方ニヨリつばき、びは、なし等ヲ用フルコトアリ

箸用材
イ、柳箸 みづき、さわぐるみニテ作ル
ロ、杉箸 すぎ、とうひ、つが、もみ、しらべ、ひば、あがまつ、ひのき、
其他わざまつ、とゞまつ等ヲ用フルコトアリ

楊枝用材
イ、房楊枝 ごそ、かんぱく
ロ、小楊枝 くるもじ及ビとうき殊ニくろもじハ香氣アリ最モ賞用セラル、關西地方ニテハもみぢ、ちしや等ヲ用フルコトアリ

碁盤及將棋用材
盤ニハいてふ、かや、かつらヲ用フ
其他やなぎ、とち、ひのき、もみぢヲ用フルコトアリ

寸
イ、軸木 やまならし、ごそ、しなのき、まつ、ひのき、さはぐるみ等ヲ用フ
ロ、小箱 とゞ松、わざまつ、赤松、ひのき、はんのき等トス

にも、果ては四國地方にも、柿の木を見る事を得た。

○柑橘類は龜山邊から所々に見ゆる、和歌山縣の有田郡が本場であることは勿論である。梨の栽培はいちの本縣から丹波市驛邊りで見ることが出来、桃は明石を過ぎて土山驛附近に栽培されてあるのが見ゆる。

これ等は車窓から見た有様に過ぎない。

○苟も日本人と生れたからは一生一度は五十鈴川の上流の神威の靈威に浴し吾等無上の幸福を思ふと同時に、清澄な原生林の空気を呼吸せねばならない。

○伊勢の外宮には清盛樟と云ふのがある。本多博士の調査に依ると周圍が三十尺許りある、此邊りは一般に欄葉樹である。

ケヤキ、アカシ、ウバメガシ、クス、ウルシ、サクラ、カヘデ、クスギ、コナラ等は三重縣に於ける欄葉樹の主なるものである。

○奈良は静寂の都である。夜の猿澤池は實に美觀である、周圍の電燈は水中に金銀の龍を躍らせる。衣掛柳と云ふのがある何でも昔寶女が投身した時衣を掛けたと云ふ話だ。

○春日山には七本杉と云ふのがあり又大杉と云ふのがある。春日の大樟と云ふのは周圍が二十九尺程あるとのことだ。

春日神社の前には七種の木と云ふのがある七種とは松、榎、椿、櫻、楓、南天、陸英であつて、これが一樹をなして居る。

○手向山八幡の前に二三本の楓が値えられ

である、これが菅原道真公の紅葉の錦、神のまに／＼と詠じた處だそやな。

○古の奈良の都の八重櫻……と歌はれた櫻は師範學校の門内にある。時代相違、時の推移には眞實に感慨に堪へぬものがある。

○吉野下市では例の鮮屋と云ふ宿であつた宿の裏は中々景色もいゝ。其處に權太手植の櫻と云ふのがある、七八百年前に植ゑたのだからまだ少しは太くても悪くない、僅か尺廻許りである、尤も三代目位かも知れない。或は其土地が殆ど岩石から成つ居ると云ふ理由かも知れぬ、誰か「權太君植ゑる時は一寸と汗を出し」何んと云つて狂句交りて申戯を云ふ者もあつた。

○吉野杉が名高い事は今更喋々を要しない事であるが、俗に云ふ吉野山へ入ると有名な雲井の櫻と云ふのがある。

こゝにても雲井の櫻咲きにけり

只かりそめの宿と思へど

悲憤血涙を搾らしむる南朝の有りし昔を追想して誰しも無量の感慨にうたれるであらう。傍は茶屋と農家である、木物の櫻は雪隠と薪小屋との間に枯れて庭に二代目の櫻が強烈な陽光を浴びて、折々緑葉を涼風に鳴らして居る。

○義經の駒つなぎ松と云ふのが吉水神社にある、之と同類の義經の鎧掛松と云ふのが大坂の天王寺にある。孰れも枯れて屋根がしてある。

其他高野山の三結の松、枕掛櫻等、傳説的

あるかも知れぬが、少くとも傳説と見ゆるものが多い。

○吾等は長い旅行の中、我等の愛すべき山若くは樹木が最も吾等に親しく往昔を語るものであることを知り得た。

何の某の墓であること云つて、蘇台冷かな墓石を撫するよりは、手植の櫻とか松とか云つた方が何となく面白く感ぜられる。尤も二代目や三代目のものでは餘り話にならぬがそれでも悪くは無い。

○「あなたの故郷は」問はれた時、故郷は故郷と思ふと何かと眼に浮んで来る。白壁の土蔵かも知れぬ、黒塗の塀かも知れぬ、人に依つて異なるが僕は庭隅の櫻とか櫻とか控とかの比較的な古木と煤びた小さな家である。それは少くとも父祖乃至祖先の人達が培はれた物なのであるから。

○或人は「或突然な事件一車上から抛り出された様な」に會ふと必ず故郷の墓を思ふこと云つた。其人は兎に角成功した有福な人であつた。尤も両親のない人である。

彼其人も冷たい両親の墓石よりも、傍の櫻とボダイジュが先づ眼に浮ぶと語つた。

○樹木が種々の印象を吾等の脳裡に與へることは云ふ迄もない事である。

○木曾の溪から四國迄の長途を吾等と一緒に歩いた樹種は勿論赤松であつた。

園藝上では無論柿の木であつた。木曾溪の流に臨んだ涼しい小家にも、麥に包圍された平野にも、土塀を廻らした吉野地方の家

情趣を帯びた樹木は中々少くない。

○吾等が和歌山城の天主閣で眺望を縱にし思ふ存分朝の冷氣に觸れた時、吾等は大樟の板を見た。大正六年四月二日城の傍にあつたのが突然倒れたのを、板にしたものであるとのことである。樹齡六百年高七十丈周圍三十一尺あつたと云ふことである。

○樹が持つた傳説にしろ、山が持つた口碑にしろ、傳説其物が吾等の先祖達に如何ほど感化、慰藉を與へたかを思へば、よしそれが荒唐無稽であつても、強ち無視すべきものでないと思ふ。

○以上は梅雨の寮舎に重苦しい頭を抱へて筆に委せた感想に過ぎない。

もどより何等の價値も趣味もない一家言に過ぎない。窓の外にはシトシトと嫌な雨が降つて居る。(完)

吉野紀行

青木忠太

その昔延元の帝の哀をどゞめ給ひし吉野の跡や尋ねんと頃は五月の末つ方櫻の花は既に散りしきて青葉蔭小暗き山路を辿り行けば涙の露しげき醜草の茂みに笑む山つゝじ一輪二輪人を迎へ顔なり

今日は早朝より王瀧なる林業視察に疲れはしてし足を引きすりながら金峯神社に賽し奥の千本を通りて西行庵に詣つ此處は西行法師三年幽居の跡なりとかや傍に又苦清水といへるあり西行が「とく／＼と落つる岩間の苦清水くみほすはともなき住居かな」と

全春、明日は運動會だといふので何も彼も打忘れて、應援の旗竿微發に飛出した後へ、給仕が同僚の玉君に島内先生の名刺を持つて来た。全君は眼をパチクリ「貴方では「僕に寄越す僕も始めて母校生徒諸君が来る日であつたと氣付いたがもう遅い折も折、最も貧弱な風をしてゐたのであつた、惜しかった、失れなら大禮服でも着込むでゐるんだつたが」茲に期せずして新家先生をも得、五年振りの二恩師と未知の兄弟分諸氏を迎へた。喜びは何物に譬へん、様もなかつた。

全春母校の諸君を上野に見送つた。翌日圖らずも某大學の長谷川要治郎君に然かも須田町の電車で一所になつた。

何より愉快なるは矢張り舊友に遭つて、寸言を交へる事である。

附記 此翌日は母校生に三日遅れて僕も日光へ旅立した。

今は三度男体山上にあり、やがて紅葉の散る頃都へ歸る豫定である。

旅から歸つて

星波生

○旅から歸つた、長い旅から。初夏の木曾を出る時(五月二十五日)「今日か半月あるんだ」と其前途遙かなのを喜んだ。

長い長いと思つた。然し最初七日は、吉野山の十里、高野山の七里の徒歩で、随分長く感じた。後の七日は譯無く済んでしまつた。

誰もタイムの流の早きに驚いた。吾等の周圍には相當の疲勞と倦怠とが包圍して居たので、誰も其時の流に對して不平や不満を説く者はなかつた。

「悉く終つた」疲れた多くの者は只かう云つた許りであつた。

○今年の關西旅行はそれは殆ど昨年と同一轍であつた。

雨の多かつた事、鳥羽から二見へ汽車で行つた事、一寸した間違で和歌山驛から和歌山市驛までテクテク歩いた事、それから外に瀬戸内海を通らなかつた事位が相違であらう。然し和歌山の浦の風光には接した。た陰で今年も昨年の様に高野僧房の輩に釣られずに済んだ。經驗の賜である。

○櫻が散つた許りの黄緑色な木曾溪を出た吾等は、濃翠で狭くなつた木曾溪へ歸つて来た。

駒ヶ岳や御岳は吾等の疲勞を慰藉して呉れた。緑深い學窓の人となつて再びペンを握つた。矢張り母校は悪くない。

○關西は神秘的な國が多い。信仰の國が大部分である、否全部と云つても謬はあるまいと思ふ。

關西は春雨のたゞり、關東は夕立的であると思ふ。嵐雪の「蒲團をたて寝たる姿や東山」の句は菅原都許りの、光景ではない。關西一般の山水を現はして居る。

關西が古典的である丈に種々の口碑傳説を持つて居る、傳説それは或は眞實の歴史で

あるかも知れぬが、少くとも傳説と見ゆるものが多い。

○吾等は長い旅行の中、我等の愛すべき山若くは樹木が最も吾等に親しく往昔を語るものであることを知り得た。

何の某の墓であること云つて、蘇台冷かな墓石を撫するよりは、手植の櫻とか松とか云つた方が何となく面白く感ぜられる。尤も二代目や三代目のものでは餘り話にならぬがそれでも悪くは無い。

○「あなたの故郷は」問はれた時、故郷は故郷と思ふと何かと眼に浮んで来る。白壁の土蔵かも知れぬ、黒塗の塀かも知れぬ、人に依つて異なるが僕は庭隅の櫻とか櫻とか控とかの比較的な古木と煤びた小さな家である。それは少くとも父祖乃至祖先の人達が培はれた物なのであるから。

○或人は「或突然な事件一車上から抛り出された様な」に會ふと必ず故郷の墓を思ふこと云つた。其人は兎に角成功した有福な人であつた。尤も両親のない人である。

彼其人も冷たい両親の墓石よりも、傍の櫻とボダイジュが先づ眼に浮ぶと語つた。

○樹木が種々の印象を吾等の脳裡に與へることは云ふ迄もない事である。

○木曾の溪から四國迄の長途を吾等と一緒に歩いた樹種は勿論赤松であつた。

園藝上では無論柿の木であつた。木曾溪の流に臨んだ涼しい小家にも、麥に包圍された平野にも、土塀を廻らした吉野地方の家

詠みしは此清水なり今でこそ遊履の跡絶え
まなき所とはなりたれば昔はこそ幽静閑寂
の境なりけり、其處より引返して降れば右
手に水分神社あり如何なる神を祀れるなら
ん一拜して石段を下るに豊公の建造に係る
由墨痕微かなる木標を認めぬ、夫より行く
事暫くにして道の右手に小高き丘あり花矢
倉と呼ぶ此處は義經の寵臣佐藤忠信が主君
の爲、寄せ来る吉野衆徒を防ぎ止め渠魁横
川覺範を斃せし古蹟なり丘に上りて一憩す
るに忠臣の心そよるに忍ばれて青葉を渡り
來る風も何となく薫る心地す、谷を隔て、
竹林院を眺み中の千本は彼方、藏王堂は此
方など指すに此れも小學生の修學旅行なる
べし紅白紫楊やまゝのラッソルかざす女
生、白き日覆に白きズボンの男生が長蛇の
陣を作りて青葉の繁みを見わつ隠れつ行く
が見ゆ夫より延元帝の「こゝにても」と御詠
ありし雲井の櫻を右に見て獅子尾坂を下り
一時義經の潜居せし所にて泉石は彼の茶博
利休が築造せしといふ竹林院に至れば女の
走り出で、庭内縦覧は料金二錢なりといふ
にぞよしの山にもかゝる風の吹き込みしか
と興をさまして其儘如意輪堂へ急ぎぬ、
左に谷開けし所緩き坂を土り行けば櫻花の
多き事第一と云はるる中の千本なり今は山
一帯の青葉なればいづれを櫻木と見分かね
ども見ゆる限は櫻の木と覺しく春の眺めさ
こそと思ひやられたり、少し行きて立札あ
り照憲皇太后の「よしの山御陵ちかくなり

のらし散りし花もうちしめつゝ一の御
歌を誌せり。夫より暫くにして石階を上れ
ば如意輪堂なり、一族百四十三人ぞ死出の
山路を契りつゝ辭世一首を書きつけし楠の
木の芳ばしさよ、當時の堂は兵火にやかれ
て現時のものとは再建なりと聞けど英魂は永
く止まりぬべし、庭上には正行の鬘塚、一
族の埋髪塚、藤本鐵石の碑などあり又彼
の優にやさしき辨の内侍の玉精塚は幾星霜
の風打雨淋に苔蒸して圓く刈り込まれし
つきの中につましましやかに立てるも哀い
深し潺湲の音立てるふき出づる噴水に手を
清め乾きし口をうるほし掃き清められし石
階を上りて右に向へば延元陵なり春逝きて
陵上に舞ふ落花なく昔を語る老僧あらずと
も土墳數尺草一莖の下、左の御手に法華經
を右の御手に御劔を握り給ひ北を睨んで崩
御あらせられし帝の眠りますかと思へば感
慨轉た新に切なるを覺ゆ陵下に拜伏して首
を回らせば松栢亭々として御陵を覆ひ松籟
咽ぶが如く古を語るに似たり低徊すること
しばし友に促されて石階を下れば蟬の聲い
と暑げに聞ゆ、如意輪堂に上りて小楠公の
歌かきつけし扉其他寶物を觀、御靈殿を拜
して出づ、汽車の時間に心せかれて足も重
ければ勝手神社、吉水神社へは廻らず直ち
藏王堂へ急ぐ、此邊漸く平坦となりて
金剛杖、エハガキ其他名勝地にあゆまれた
る物賣る町を通りて行けば左手の小高き丘
の上に苔むせる古屋根高く朱塗の色あせし

一伽藍を見る之れ藏王堂なり、堂内には神
代杉の柱脚の柱など珍らしきものあり今
は特別保護建造物なりと云ふ、元弘の役、
護良親王の帷幕を張りて將士を集め最後の
酒宴を催し給ひしといふ四本櫻は堂前にあ
り、但し今は二本のみなりさのみ老木にあ
らぬが聊か物足らぬ心地す、
死出の山越ゆるもうれし天てらす神の
みするの御子と名のりて
護良親王の御身代りとして千古の芳名を止
めて花と散りにし村上義光の高橋の跡はい
づこと神符賣る人に問へば彼處の礎がそれ
と指さす、昔深き石階を挟んで疊める半崩
れの石垣はさすがに往時の名残をどめたり
當時賊兵の雨なす矢の的となりけんと思ゆ
る松の老木は颯々の音立て、いと昔を語
り顔なり、花よりも團子賣る店多き下の千
本を右手に見て葉櫻の下行けば左に義光の
墓あり吉野宮を拜して降れば六田の渡し、
それを渡れば吉野驛なり。
芳山十里の旅、心をどめて尋ねば、わか
しき思出の数々あらんも今は行手を急ぐ旅
の事とて後に心を残して鐵路和歌山に向ひ
ぬ。(終)

第二學年修學旅行日記

五月二十日 月 至 自 福島 樺山濃翠
新學期の初めより今年はと樂しき夢に憧れ
し旅行も愈々二十日出發と確定しぬ、心に
掛りし朝の雨も立出づる頃は漸く霽れ渡り

て曉鬮次第に淡れ行きぬ雨霽れの朝の空氣
を破る汽笛の聲に新緑の曉風颯と面を拂へ
ば懐しき福島の町も早や後になりたり。時
正に七時、重々として山又山の濃翠の間を
縫ひて、其昔武田氏と木曾氏が戈を交へ
しと傳へらるゝ鳥居峠も過ぎ長蛇の如き我
汽車は木曾の山路を出で小ながら平原性を
帯びたる鹽尻に乘換の爲め下車す、甲府方
面行に一時間餘あるを幸ひ縣苗圃を見學せ
んとて向ふ、中途該苗圃は生憎本年度より
廢止となり片倉氏の蔬菜園となりたりと聞
き引返し、十時七分の列車に投じて東す、
旅行第一日とて樂しき希望に満てる一同は
車中にて或は歌ひ或は吟して時の移り行く
を知らず、已にして岡谷を過ぐ林立せる煙
突流石は日本一の製絲場と知られたり。
暫くして細波激瀾たる諏訪湖を望む、二三
のモーターボートの白波を蹴りて走る様我
等の目には珍しく面白し。小淵澤よりは山
梨縣の地なりと聞く、迎へては去り去りて
は來る山々も木曾路の峻山とは異りたる如
く感ぜられぬ。車の輪の廻るに従ひ菜花錦
を織りて麥浪十里蒼々として車窓を打つ甲
州の盆地に出でやがて甲府市ステーション
に下車したる一同は先輩上田、小林、宮下三
君の親切なる出迎と案内に依り、驛のす
ぐ前なる淺野氏の古城に登る、天主台は頗
る高く甲府市及附近の地を一望の内に收め
御べし、三君より種々の指示説明を受く、
天主台下には目下一大碑建造中なるが是れ

本縣恩賜林記念碑にして、此の建造に用ふ
る石碑は一切恩賜林内のものを用ひ高さ九
十餘尺にして本邦第一の最高碑となす計畫
なりと云ふ。城を出でて縣立農林學校に足
を運ぶ、同校は一昨今の地に移轉せるも
のにて驛よりは二十餘町、町端の閑靜な
る地に在り、校門を入りて玄關前に憩ふ事
しばし林學課主任の先生の案内にて校内及
林學上の標本室並に養蠶室等に導かれ、寄
宿舍も一瞥せり。建物も新しく設備も完
全なる点に於て嘆賞するに價す、學校を辭
して真向ひなる農事試験場を參觀す場内に
入りては標本室を一覽し、出でては稻麥甘
藍の外甲州名産葡萄等の農作物の試作せら
れあるもの、説明を聞き七時頃相生町竹屋
旅館に投ず。今日は旅行第一日の事とて元
氣旺盛刺へ迎へた愉快の情は笑話とな
り高談となりて寢に就けど容易に眠られず
とかくして漸く夢路に入りぬ。
五月二十一日 火 至 自 甲府 延
深い、眠より揺り起され五時過ぎ起床、
昨日の疲勞僅かに足の裏に残るのみ、急ぎ
旅装を整へ宿舎を出づ、六時甲府より鐵道
馬車に乗じ皷澤に向ふ。明け放れたる町の
朝、四方の群山歴々として其雄姿を現し白
峯の紅紫色なる八ヶ岳深碧なる、而して芙
蓉峯の嫣然として蒼空高く笑める恰も我等
を迎ふるもの、如し、車窓に迫る青麥は波
浪に似て際涯なく連り其間に點綴せる農家
の様も捨て難き景色なり。やがて龍王に至

れば徳川時代の兵學者又勤王家として其名
世に知られたる正四位山縣大貳の墓も近く
に在りと聞く、八時過ぎ七分皷澤に着し三
艘の舟を雇ひて富士川を下る、川舟は一同
に取りては珍らしきもの、一なれば元氣殊
によく愉快げに舷に踞して兩岸を望見する
に美しく殖林せられたる山多し。あれは杉
や檜やなど、指ざし語る折々三三人の舟子
長き綱にて舟を曳きながら岸上を漕りくる
に遇ふ、其舟子の足を見れば足の前半だけ
の小さき草履を穿てり。こは足を爪立て、
あるく爲めかどこの方には用なければなり
河底岩多きに流早ければ舟底きしりて、碎
けはせずやと膽を寒からしむること幾回最
も急端なるは屏風岩附近なり。水勢一時に
聚り岩に激し、浪花と散りて舟中に打ち入
り着衣ぬるゝ許りなり。早川の合流する
所は水勢奔騰波怒り舟まひあはや水底の藻
屑と手に汗を握らしめぬ。かくて波木井に
着せしは十二時頃なりき、此處より身延山
久遠寺に入らんとす、山道を辿りて進めば
頭上斷崖の上に綠滴らんとする松樹の枝を
張れるあり見事なり。進む事二十餘町にし
て身延山麓に達すれば總門あり「開會關」の
三大字を書せり。夫より少し登りて身延町
に入り玉屋旅館に着す、一同こゝに旅装を
解き湯茶にて渴を醫し一憩の後參拜の途に
上る、壯大なる山門を仰ぎ過ぐれば天にも
昇るべき大石坂あり其高さ五十八間二百八
十七級なりと云ふ。石坂を登り盡せば祖師

堂に達す。御堂は南面し結構宏大にして内に入りて拜せば金碧燦爛として目を奪ふ寶龕には日蓮上人の靈像を奉安す、之れ中老日法の作なりとか、これより三十間餘りの廻廊を経て御眞骨堂に至る。奥に進むと十餘間にして八角の寶藏ありこれぞ高祖の御眞骨を奉安せる御たまやにして珊瑚の天蓋、瑪瑙の璣珞、善美を盡したる堂内中央の蓮華台上的の御寶龕の内八角の水晶の御玉塔に納れ奉るは眞碎の御舍利にして明かに拜し得べし。深艸元政の

なにごに故にくだきし骨のなごりぞと
思へば袖に玉ぞ散りける。
も思ひ出さる。堂宇の美、到底吾等が筆舌の及ぶ所に非ざれども、稀代の偉人日蓮上人を慕ふの念、いやが上にも増し靈妙なる感に打たれぬ。去りて一同宿舎に戻り安樂の息をつけば時計は五時を過ぎたり夕餐後は町中を徜徉し名産榎拾、羊羹、記念繪葉書等を求むるもの多し。

五月二十二日 水 自 沼津
明くれば二十二日今日は芝川より輕便に乗るに後れては一大事とて四時前温き床を離れぬ。昨日の疲勞何處ともなく消へ去り。全身生れ更りたる如く齒を磨く指先にも力充滿せり、急ぎ旅装を整へ宿を出れば、邊りは未だほの暗く残星の二つ三つ靜かに明け行く空の内に閃けり。五時大野に出て此處より又昨日の三艘に分乗し急流を漕ぎ下る、兩岸の連山多くは見事なる殖林地に

して手入も随分行とどけり。一同は元氣昨日に劣らず詩を吟じ歌をうたひなごして行く程にいつしか睡魔に襲はれて眠るもあり有名なる弓立岩も夢の間に過ぎ製糸場より立上る黒煙に迎へられ芝川に着す、之れ時に八時を過ぐる事十分なり。これより富士身延輕便鐵道に乗らんとすの豫定なりしも、都合に依り又岩淵迄下る、やがて彼方は海ま、あすこは海よと指さすに愉快さ頓に増して堪らず舟の中に立ちて見渡すに渺々たる大平洋の海……其上に點々と帆船を浮べ欣然として木曾の健兒を迎へぬ。こゝに於て岩淵川原に舟を捨て岩淵より十時二十六分の列車に打乗り江尻に向ふ、中央線のマツチ箱に引換へ東海道汽車の心地よき車窓より紺碧の海に白帆の浮べるを飽かず眺めつゝ江尻に下車しそれより清水港に出づ、彼の有名なる高山標牛の墓のある龍華寺は此の附近なり。防波堤の上に立ちて海風に吹かれながら船腹の赤きもの又は黒き汽船など多忙そうにして又何んとなく悠閑なる所ある眞晝の港を心行くまで眺め、それより小蒸汽船を備うて松原に至り羽衣の松を見波打きはに行きて、筋骨逞しき漁夫の引網にて魚を捕ふる様を眺むる事や暫し名残を惜みて江尻に戻り三時四十九分の列車に乗り右窓に清見灣の絶景を眺めつゝ五時三十分沼津に下車す、當地は御用邸ある所にてステーションより二十町なる千本松原は街巷を避けて松樹密に風景殊によし

然し旅の疲に見る暇もなくステーション前なる山本館に旅装を解きぬ。(未完)
夏の夕
在臺灣 今井蓮華生
焼けつく太陽 西に落ち
ヒグラシ鳴きて 空赤し
時にいそぐ ひご群れの
鳥の姿の 淋しさよ一
芭蕉の蔭より 立ちのぼる
夕げの煙 暮ひつゝ
戀歌うたひて 今日も亦
水牛ひきて かへるギナ
註、ギナハ臺灣語ニテ小供ノコト

雑報

○里見撃劍教師の名譽、里見教師は去る五月中京都武徳會撃劍試合の節優勝を得其節總裁宮殿下の御前試合を辱うせるが今回技術精練の廉を以て全宮殿下より精練證を附與せられたり
○陸叙、六月廿八日附七宮校長は高等官六等待遇に新家教諭は同七等待遇に陸叙せられたり
○實習、夏季實習は七月十七日開始全廿九日終了の筈なるが實習作業は三學年は測量測樹、二學年及一學年は造林地の刈拂、苗圃手入、農圃實習等にして實習終に近づき

て二學年は駒ヶ嶽、一學年は御嶽登山をなす事例年の如し
○一年級長副級長任命、一年級長副級長左の通り任命されたり
一年級長 村松二郎
全副級長 三井房次

大正七年度校友會豫算會

記 事 鷹 見 生

○第一回部長會 四月早々本年度校友會新豫算編成に着手すべかりし處、庭球部飯島顧問先生を失ひ幾程もなく辯論部北村顧問先生を送り其後塚越庭球部顧問着任ありしも、修學旅行其他にて錯雜多事の爲遷延し來りしが、六月二十日放課各部長參集し各顧問先生と共に、本年度事業及び之が經費に就きて擬議する處ありき。

然れ共昨年來の物價暴騰は收入に制限ある我校友會豫算案に多大の影響を及ぼしたるのみならず、更に本年度は柔道部及縣下中等學校運動會費なるものを新に加算せしを以て合計約二百圓の不足を見るに至り、各顧問先生及び部長種々討議せしも容易に決せず、尙充分研究の餘地存すものごし午後六時散會せり。

○第二回部長會 新たに中村辯論部顧問先生を迎へしより、六月二十五日再び部長參集し各顧問先生と共に討議研究する處ありしも、從前通り不足金額補充の餘地を發見する能はざりしを以て遂に會則第十七條の

一部を改正し校友會費を本年度より拾錢値上せんと案を提出し之により本年度豫算大綱を定め、更に總會の日に於て在校會員に諮る事とし薄暮に至り散會せり
○總會 翌二十六日午後一時より講堂に於て本會總會を開催しまづ七宮會長議長席につき會則改正及校友會費値上案を提出し、その理由經過等を詳説して賛否を問ひしに一人の異議なく満場一致を以て可決せり。夫より引續き直に昨日編成したる本年度豫算案を提出し、尙七宮會長之が編成經過に付き述べらるゝ處あり、次いで各部長の内譯報告及び説明ありて原案通り可決せり。

其收入及支出左の如し
○總收入 金六百四拾七圓四拾六錢
○總支出 金六百四拾七圓四拾六錢
内 譯
金五百七拾六圓 卒業生よりの雜誌代
金七拾圓 前年度繰越金
金壹圓四拾六錢

○總支出 金六百四拾七圓四拾六錢
内 譯
金五拾六圓七拾參錢 庶務部
金百九拾七圓九拾參錢 雜誌部
金七拾六圓五拾錢 辯論部
金參拾四圓 擊劍部
金參拾八圓 庭球部
金參拾貳圓 弓術部
金六拾六圓參拾錢 遠足部

金七拾四圓 柔道部
金四拾八圓 縣下中等學校聯合運動會參加費
金貳拾四圓 秋季運動會豫備費

辯論會便り

世はフレンジユな色に包まれて蘇峽にも漸く夏は訪づれた。
我が校友會辯論部は此の男性的活動の好シ一ズンを逸すまじと七月六日を期して第二回辯論會を催した。左に當日辯士諸君の芳名を記さう。
開會之辭 部 長
何事も考へて行へ 大原猛志君
道徳と經濟との關係 西村清志君
現代學生の風紀に付きて 早川秀雄君
善習慣を養へ 山中三十四君
偶 藤井逸郎君
大阪城を觀るの感 山本茂君
己惚を誠む 塚越先生
我等の責任 原英雄君
偶 田中一君
農業は最も健康を職業 藤井 鋼君
雨 佐塚甲子君
反 抗 鈴木靜夫君
偶 感 小林愛司君
偶 感 吉村幸助君
日獨戰爭之一端 小貫先生
偶 感 千田瑞穂君
閉會之辭 部 長

閉會之辭 部 長

會員消息

○宇佐美周紫君、新潟縣林業技手の空君は五月以來農業技手と爲り副業獎勵主任として活動されつゝあり

○加茂憲太郎君、四月末高山小林區署に就職せられたり

○松澤萬吉君、石川縣大聖寺小林區署に轉任せられたり

○加藤正次君、今回樺太廳技手に轉任せられたり

○大久保猪三郎君、茨城縣高萩小林區署在勤を命せられたり

○田中泰吉君、六月十一日付を以て左の通り辭令に接せらる

任帝室林野管理局技手。命札幌支局中川出張所在勤

謹告

林友代に付會員諸君より問合の向も有之候間爲念左に申上置候

大正二年卒業(第十回)の諸君は本年三月にて前納金切と相成候

大正三年三月卒業(第十一回)の諸君は大正八年三月にて前納金切と可相成候

以下之に準する事と御承知相成度候

林友代領収報告

金壹圓 松澤萬吉君
 金壹圓 中村豊吉君
 金壹圓八錢

金壹圓 嶽野利雄君
 金七拾貳錢 小松精内君
 金五拾錢 宮入汎省君
 金參圓 南村末吉君
 金壹圓 木下稗藏君
 廣瀬靜之進君
 金貳圓七拾錢 中島源一郎君
 金壹圓 林省三君
 金貳圓七拾錢 新井喜多雄君
 金壹圓參拾錢 島田雄太郎君

内藤先生謝恩金領収報告(第二回)

金五拾錢 森次潔君
 金五拾錢 柳澤得衛君
 金五拾錢 吉田佐十郎君
 金壹圓 岩田元吉君
 金壹圓 木下稗藏君
 金五拾錢 大森悅君
 星加正夫君
 川口勇二郎君
 金壹圓

北村先生謝恩金領収報告(第二回)

金五拾錢 森次潔君
 金五拾錢 柳澤得衛君
 金五拾錢 吉田佐十郎君
 金五拾錢 宮入汎省君
 金壹圓 岩田元吉君
 金壹圓 木下稗藏君
 金壹圓 大森悅君
 飯沼要人君
 金貳圓

金五拾錢 近森良材君
 金五拾錢 星加正雄君
 金參圓 川口勇二郎君

謝恩金領収報告

金壹圓 大塲先生へ 川口勇二郎君
 金壹圓 福山先生へ 川口勇二郎君

寄贈 在大連川口勇二郎君より大連名所繪葉書十五枚本會宛寄贈せられたり

運動具購入 嘗て本校助手たりし川崎本雄氏が退職の際本會に寄附せられたる金拾圓參拾錢は元來スキー發展の爲寄附せられしものなるが今回同氏の承諾を得て運動器具砲丸、圓盤等を購入する事とせり茲に同氏の快諾を感謝す

大正七年七月廿三日印刷
 大正七年七月廿五日發行

編輯兼發行人 安井正夫
 印刷者 川崎本雄
 印刷所 長野縣西筑摩郡福島町五七〇番地
 發行所 蘆澤書店
 長野縣西筑摩郡福島町二八九番地

定價壹部金參錢